

#### 四、ソコムのふんやう

聚英<sup>ヂーイング</sup>棧<sup>ジャン</sup>で水野ハナに会った後、その日のうちに私はブラゴベシチェンスクに戻り、在留日本人会事務所に顔を出した。

事務所に入ると、藤井青年の他、髭<sup>ひげ</sup>を生やした羽織袴<sup>はおりはかま</sup>姿の日本人が三名いた。いずれも見知らぬ顔である。

「やあ、菊池さん」

藤井青年は、立ち上がってお辞儀し、

「このたびは、大変でしたね。まさか私が紹介したマラトフ大尉があんなことになるなんて、思いもよらぬことでした」

「いえ、お恥ずかしい。とんだ不覚を取りました」

藤井の背後で、羽織袴姿の日本人たちが顔を見合わせた。ちらりと苦笑する者もいた。酔っぱらって街中で寝てしまい、相方が殺されるのにも気づかなかった腰抜けの元軍人。私は、そんなふうに噂されているのだろう。

「まあ、おかけください」

藤井は椅子をすすめ、それから、三名の日本人を指さして言った。

「彼らは、東興<sup>とうきよう</sup>会<sup>かい</sup>会員の皆さんです」

三名は頭を下げ、林田、山本、海野、と名乗った。私はいささか驚いた。

東興会は、ロシアの東方進出を憂<sup>うれ</sup>い、軍備増強や朝鮮半島領有など対外強硬路線を唱えるアジア主義団体である。会員には有名な政党政治家や新聞人も名を連ねている。表向きは「支那保全」を唱え、支那を蚕食<sup>さんしょく</sup>しようとする西列強の野望を阻み、同じ漢字を使うアジア人として支那との提携を訴えていた。

その東興会が、このシベリアの地で、何をやらかそうとしているのか。

「では、われわれはこれで」

と三人は、ぞろぞろと事務所を出て行った。藤井は彼らを見送った後、俯<sup>うつむ</sup>いて言った。

「とんだ跳ねつかえりを送り込んできた。困ったもんです」

「そうなんですか？」

と問うと、藤井は苦笑した。

「どうもあいつら、ここで騒ぎを起こしたそうなんですよ」

「騒ぎ？」

「ええ、そうです。東興会は、今回の義和団騒ぎでいささか揉<sup>も</sup>めているようで、欧米列強と歩調を合わせ、騒乱が鎮まるまで様子見しようという一派と、積極的に乱に介入し、清

国政府打倒までもっていくべきだという一派がある」

「清国政府打倒？」

「ええ」

藤井は説明した。十七世紀初頭、北方の女真族が明を滅ぼして建国した清国は、支那の歴史からすれば異端の王朝ではないか、という説が、漢民族の知識人層に生まれていた。一八四二年に阿片戦争で敗北して以来、西欧列強の侵略に打つ手もない清国政府への不満が、無能な清国王朝を滅ぼして、漢民族による新たな政府を樹立すべきであるという運動が広がっているのだ。

東興会には、そういう清国打倒の動きを支援しようとする一派があると言うのだ。

「義和団に介入することが、清国政府打倒につながるんですか？」

私の問いに、

「彼らの考えではね」

藤井は頷いて説明した。

「例えば、この地でロシア軍兵士が、義和団の手先に殺される事件が起こったとします」

私はどきりとした。

まさに、それはすでに起こっていたからだ。

私の目の前で……。

「そこで、ロシア軍が報復のため清国軍と交戦する。当然、装備も戦意も格段に上のロシア軍が勝利するでしょう。民衆は清国政府を見放し、革命がおこる。そこで、親日的な漢民族活動家たちを擁して革命政権を樹立させ、日支が手を携えて西欧列強の圧迫をはねかえす……とまあ、そんな筋書きです」

「誰か、有力な親日革命家の団体があるのですか？」

「あります。興漢会です」

興漢会とは六年前、清王朝の打倒と漢民族復興を掲げる運動家たちが糾合して設立された。翌年、武装蜂起計画が洩れて、幹部たちは日本に亡命した。日本の国家主義団体は、この連中を優遇し、資金援助をしている。

「東興会は、義和団が引き起こした今回の騒動こそ、興漢会に革命政権を樹立させる好機と見ているわけなのです。まるで雲を掴むような話で、私みたいな若輩者の頭じゃ理解できない夢物語だ」

まだ若いのに、どこか醒めたところのある藤井青年は、そう言うため息をついた。

私は日本人会事務所を出て、マラトフ大尉の家に向かった。大尉の遺族は、リザヴェータ夫人の実家に行ったまま帰ってこない。当分は空き家になるから、自由に使ってよいと許可されていた。

煉瓦造りの家に入り、暖炉（ベチカ）に火を熾し、大柄な大尉やその夫人、小さな子供たちと団欒をともにした食卓に市場で買ってきたパンやソーセージ、ウオッカなどを並べながら、私はふと、日本に残してきた娘は、そろそろ二歳になることに気づいた。

妻は、九州福岡県の名士である親元で世話になっている。大勢の親戚に囲まれ、娘もすくすく育っているはずだ。

「そういえば……私は思った。」

最近、あの悪夢をまったく見ていない。

妻と、生まれたばかりの娘を殺して、自分も死のうと思ったほど、私を苦しめていた悪夢——幼い女の子を射殺してしまった、あの台湾での悪夢を。

やがてウオッカの酔いが回ってきて、眠りに着いた私を起こしたのは、ドアを叩く音だった。窓を見ると、まだ早朝である。

ドアの覗き穴のぞに眼を近づけると、外に三人の和服姿の日本人が立っていた。昨日、日本人会事務所で会った東興会の会員たちだ。

何しにきた……。

不審に思いながらドアを開けると、三人は一斉にお辞儀した。

「朝早くからすみません」

中央にいた八の字髭の男が口を開いた。

「昨日お会いした、東興会の林田と申します」

「山本です」

と眼鏡の青年が名乗り、

「海野です」

と頬髭ほおひげの男が言った。いちばん年長らしい穏やかな顔をした林田が

「あがらせていただいても、よろしいですか？」

と腰をかがめ、上目遣うわめづかいに問うた。私は、どうぞ、と言って三人を招じ入れた。

応接室に通し、湯沸かし器サモワールで茶を淹れ、ロシア式にジャムを添えて供した。三人は礼を述べながら熱い茶に口をつけた。

「時に……」

林田が言った。

「マラトフ大尉の件は、お気の毒でした」

私は、「面目めんぼくないことと、思っています」と俯いた。林田は、どこか下卑た笑みを浮かべて続けた。

「実は、今日お伺いしたのは、その件でしてね。菊池さん。あなたは確か、ロシア軍の将校宿舎でご馳走になり、大尉と一緒に帰宅中、酔いが回って路上で寝てしまわれた。で、目を覚まされたら、すでに大尉は殺されていた、そう警察に述べられたそうですね。だから、犯人は何者だか分らない、と」

「ええ……」

私は小声で答えた。林田は言った。

「その件で、実は知り合いの支那人から昨夜、面白い話を聴きましたね。あなた方が、ロシア軍の将校宿舎を出られたちようどその頃、殺人現場の近くで、赤い服を着た背の高い

女を見た、という男がいるそうなんです」

私は、返事をしなかった。

赤い服を着た背の高い女。まさに、劉春燕リウチュンイェンではないか。

林田を見返した。唇は笑っているが、探るような眼付きは真剣そのものだった。

私は問うた。

「まさか、その赤い服の女が、マラトフ大尉を殺したというのですか？」

林田は、笑みを崩さずに答えた。

「そういう噂です」

「しかし、マラトフ大尉は、首の骨を砕かれて殺されたと聞いた。女が一人で、あの大柄で大力のロシア男を殺せたとは、とても思えない。なぜ、そんな噂が……」

「菊池さんは、紅灯照ホンデンテウというのをご存知ですか？」

義和団に属する、女だけの組織のことだ。隠しても仕方ない。私は正直に、頷いた。林田は続けた。

「女とはいえ、なかなか侮れぬ剛あなぢの者ぞろいと聞きます。なんでも、マラトフ将校の死体には、首が砕かれたほかに外傷もなく、実に鮮やかな手並みだったとか。紅灯照ホンデンテウならば、そのくらいやつてのける者がいるはずだ、と支那人たちは言うのです。ま、それともかくですな……」

林田は、身を乗り出して言った。

「彼らは言うのですよ。どうも一緒にいた日本の元軍人が怪しい。あるいは、義和団の手先で、紅灯照のロシア軍人殺害を手助けたんじゃないかと……あいや、私はそんな話は信じちやいませんよ。ただ……」

ますます唇を広げて、林田は笑いながら続けた。

「一応、そういう噂があることを、お耳に入れておいたほうがいいかと思ひましてね」

私は、無言で林田と並んで座っている二人を見やった。

藤井青年によれば、彼らは、義和団事件をきっかけに起こったロシア人と支那人の緊張関係に介入し、騒ぎを起こすことで革命の導火線に火をつけることを狙っているという。もしそうだとしたら、彼らが私に、どんな答えを望んでいるかは明らかだ。

マラトフ大尉を殺害したのは、紅灯照の劉春燕リウチュンイェンだと。

だが、彼らの望みに応える義理は、私にはない。

「ありがとうございます」

私は三人に頭を下げた。そして、こう答えた。

「残念ながら、私はずっと寝ていたので、本当にマラトフ大尉を殺した者を見てはいないのです」

「もし、そうだとしたら」

頬髯を生やした海野が、はじめて口を開いた。太った体に似つかわしい胴間声どうまごえだった。

「菊池さん、大日本帝国の軍人にあるまじき、醜態ですな」

眼鏡をかけた山本が俯いて苦笑する。挑発している……。  
私は頭をかいて言った。

「お恥ずかしい話です」

海野と山本はむつとした顔になったが、私は無表情を通した。沈黙がしばし続き、年長の林田がわざとらしく顔をほころばせて、

「いや、長々と失礼しました。本日はこれで失礼しましょう」

と立ち上がり、他の二人も続いた。玄関に向かおうとして、ふと、林田は足を止めて私を見た。

「そういえば、菊池さん、瓊瑠に聚英棧という旅館があつて、日本人の別嬪さんが太太をやっているそうですな。菊池さんともご昵懇だとか」

返事ができなかった。顔がこわばるのを覚えた。こいつら、どこまで調べてやがる。

否、誰にそのハナの事を聞いたのだろう。

林田は続けた。

「満洲馬賊とも繋がつているとか、その旅館には義和団も出入りしているとか、いろいろと悪い評判を聞いていますので、ご用心なさることですな」

伊東大尉が喋つたのか……。

私は唇を噛んだ。聚英棧に柳春燕が現れ、ハナとともにどこかに出かけた件を、伊東大尉に報告した事を悔やんだ。

あいつ、こんな怪しげな連中に情報を漏らすとは……。

林田たちは、お辞儀をして去つていった。ふと、細面に眼鏡をかけた山本という男の、着物の襟首から覗いた右の肩先に、大きな刀傷が見えた。頬髭をはやした海野の懐は、短刀を呑んだように膨らんでいる。それなりに修羅場をくぐってきた連中なのだ。

すぐに瓊瑠に戻り、聚英棧に行つてハナに知らせねば……。

荷物をかき集めて外に出ようとして、私は思いとどまった。

ひよつとしたら、さっきの三人、あるいはそいつらの仲間、雇われた連中が、家の外で見張っているかもしれない。

私は、手ぶらで外に出た。街中に出て、食料品や日用品を買った。一度家に戻つて、窓から外を覗いた。

監視がついていない事を確認してから、私は、財布と身分を証明する書類だけを携えて家を出、船着き場へと向かった。

アムール川を船で渡つて対岸の瓊瑠に着くと、城門のあたりは相変わらず、ひっきりなしに清国兵が出入りしている。街中にはいると、そこいらで、支那人が数人集まり、噂をかわしあう光景が見られた。

聚英棧の前では、数名の支那人苦力（肉体労働者）たちが、馬車に繋げた荷車から藁袋を下ろし、肩に背負つて運び込んでいる。

「清チヨシ小コ心シン哦オ（気をつけてね）！」

流暢リウチャウな支那語で苦力たちを指図しているのは、驚いたことに静枝シズエだった。髪を三つ編みに結った支那服姿も、すっかり板に付いている。

「おや、菊池さんずらか？」

静枝は、急に生まれ故郷の山梨言葉に戻って、私に駆け寄りぺこりと挨拶した。

「忙しそうだな」

私は、右往左往する苦力たちや、次々と運び込まれる藁袋を見て、問うた。

「何を運び込んでいるんだい」

「食べもんずらよ」

静枝は答えた。

「食べもの？」

「米とか麦とか、塩。食べもんをできるだけ買い入れろって、ハナさんの言いつけずら」

「静枝さん！」

現れたのは、春美だった。

「ごめん、荷物が多すぎて、倉庫で苦力たちが押し合いへしあい、混乱してるんだわ。ちよつと代わって仕切ってくれない？」

「あいよ」

静枝がなかに入っていくのを見送っていた春美は、

「あーあ、ハナさんも殺生せつしような話だよ。こんなに食べ物仕入れて、あたしらだけで何とかしてくれて。からだが幾いくつあっても足りやしない」

と愚痴をこぼしてから、やっと私の存在に気づいた。

「あら、菊池さん。ごめんなさいね、気がつかなくて」

「いや、いいんだ」

艶つやっぽい仕草でお辞儀する春美を手で制して私は問うた。

「一体、そんなに食糧を集めてどうする気なんだい？」

「だって、なんだか知らないけれど、騒さわぎが起おこるんでしょ？」

春美は、目をぱちくりさせて言った。

知しっているのか……。そう確かめようとした時、

「菊池さん、どいて！」

見上げると、二階の窓からソヒョンが顔を覗かせていた。窓のあたりに数人の苦力がい  
て、屋根にかかっていた「聚英ヂエイイン棧」の大看板を外し、縄をつけて、私が立っているあた  
りの地面に降ろそうとしていた。

「嘩ハ哟イヨ（よいしょ）！」

「嘩ハ哟イヨ（よいしょ）！」

苦力たちに合わせて、ソヒョンや春美も掛け声を張り上げる中、大看板が地面に下ろさ  
れ、苦力たちがどこかへ運び出した後、窓から、日章旗がたかだかと掲げられた。

白地に日の丸の旗が、翩翩と風にたなびいた。

食料袋の運び込みが終わり、苦力たちが去った後、入り口に施錠してから、ソヒョンと静枝、春美たちは食堂でお茶を飲み、お菓子をつまみはじめた。

「すごい騒ぎだったな」

同席して茶菓を振る舞われた私が言うと、ソヒョンが答えた。

「太太の命令」

「とうとうと？」

「騒ぎが起いたら、ここに、支那の人たち、入れる」

ロシア軍と清国軍が衝突すれば、当然、この街に住む支那人たちも巻き込まれる。ハナはそれを見越して、この聚英棧を避難場所にしようとしていた。籠城覚悟で食糧を仕入れ、掌櫃（番頭）の薛をはじめ支那人の雇い人たちは遠くに逃がした。残るはハナ、静枝、春美の三人の日本人と、朝鮮人とロシア人の両親から生まれたソヒョンだけ。支那語の看板をおろし、日章旗を掲げた。

ここは中立地だと示し、ロシア軍、清国軍双方の介入を防ぐためだ。

相変わらず、やる事が早い。二十歳のハナの鮮やかな手並みに、私は舌を巻いた。確かに、罪もない市民が騒擾に巻き込まれるのを少しでも助けようとするなら、他に手段はあるまい。

「で、菊池さん、今日はなんの用か？」

そうソヒョンに問われ、私は躊躇った。いくら修羅場をかくぐってきたとはいえ十二歳のソヒョンや、この地に来たばかりの静枝や春美に、どこまで話せばよいものか……。

「ハナさんがいないと、話せないこと？」

疲れ切った表情で、菓子を頬張っていた春美が、黙っている私に問いかけてきた。答えられずにいると、春美は続けた。

「じゃあ、あたしらが、ハナさんから教えてもらってることが言うね。義和団とかいうならず者集団が暴れていて、ここまでその手先がやってきて、ロシアと支那がぶつかって騒ぎを起こすよう煽ってる。で、菊池さんの目の前で、義和団の女が、ロシアの軍人さんを殺した。でも、菊池さんは騒ぎが起るのを恐れて黙ってる」

私が告げた事を、ハナは、この女たちに包み隠さず喋っていたのだ。

——お前は、ロシア軍の情勢を探ってほしい。少しでも怪しい動きがあったら、すぐに知らせに来て。あたしがまだ留守していても、残った子たちに必ず教えてくれ……。

ハナの言葉が思い出された。私も包み隠さず話すしかない。

「あたし、さっき、それ見たぞら！」

羽織袴姿の三人の日本人の事を告げると、静枝が頓狂な声で叫んだ。

「見たのか？」

そう問うと、静枝は頷いた。

「はい。船着き場で、渡し船から下りてました」

久しぶりの和服姿に驚いたので、八の字髭、頬髭、眼鏡と三人の特徴まで強く記憶しているという。

あの連中、やはり瓊瑤まで来ているのか……。

静枝によると、彼らがここに着いたのは、私が乗った船が着く二時間ほど前との事だった。まだ、聚英棧ヂョウエイケンを突き止めてはいないようだが、それも時間の問題だろう。

「大きな騒ぎを起こそうと企んでいる連中だ。どうかしないとな」

「ねえ、菊池さん」

ソヒョンが、食卓に頬杖ほおづえをつき、笑顔で問うた。

「あの三人、殺しても、かまわない、そういう人たちか？」

静枝と春美が仰天し、

「ちよつと、ちよつとソヒョンちゃん！」

「子供のくせになんてこというの！」

と諫めたが、ソヒョンは二人を見返し、ぽかんとした表情で言った。

「でも、あいつらが騒ぎを起こしたら、たくさん、人死ぬ」

「いや、そういうことじゃなくて……」

「殺すのはだめずらよ、絶対だめ！」

二人に押さえつけられ、ソヒョンは口を尖とがらせた。

ハナなら、どうするだろう……。私は考えたが、何も思いつかない。

不意に、玄関のドアを叩く音が響いてきた。

「在ゾライマア嗎マ（誰かいませんか）？」

下手な支那語に続いて、日本語も聞こえてきた。男の胴間声だった。恐らく東興会の三人組だ。

「ここのはずだが……看板も出てないな」

「あの日章旗はなんだ？」

ソヒョンが食堂を出て二階にあがった。やがて降りてきた彼女は、

「八の字髭に、頬髭に、眼鏡の三人だった」

と告げた。やはり、あの連中が来たのだ。静枝と春美は、互いの手を取って寄り添い、

困惑している。

「菊池さん」

ソヒョンが静かに言った。

「ハナさん、帰かえてくるまで、あいつら、静かにしといてもらおうよ」

「静かにしてもらおう？」

ソヒョンは答えず、静枝と春美に耳打ちした。二人の女は互いに顔を見合わせたか、やがて頷いた。

「菊池さん、隠れていて」



ソヒョンに言われ、私は食堂につながっている厨房に隠れた。そっと覗いていると、ソヒョンが「清稍等（少しお待ちを）」と明るい声でドアに向かい鍵を開けた。

林田、山本、海野の東興会三人組が入ってきた。食堂の内部を見回し、それから支那服姿の女三人を見つめた。

「太太在 哪 里 呢（女主人はどこにいる）？」

林田がにやにやしながら問うた。ソヒョンは首を傾げて笑い、いきなり、林田の股間を蹴り上げた。

林田は白眼を剥き、両手で股間を抑えてうずくまった。

それを合図に、春美が眼鏡の山本に、静枝が頬髭の海野に飛びかかった。それぞれ、相手の鞆丸に、膝小僧を打ち込んだ。

たちまち食堂は、うずくまって苦悶する林田、俯せに倒れて震える山本、仰向けになって海老ぞりに痙攣する海野、三人の男たちの号泣と呻き声に満たされた。

阿片取引の見張り番二人を、瞬時に殺害したソヒョンや、生まれてから喧嘩で男に負けたくないと言った豪語する静枝はともかく、お妾稼業で生きてきた春美までが何時の間に、ここまで鍛えられたのだろう。

感嘆していると、女たちは素早く三人を椅子に座らせ、後ろ手に縛り上げた。私も手伝おうかと厨房を出ようとしたが、気づいたソヒョンに目配せで止められた。確かに、顔を知られている私がここにいる事を知られてはまずい。

「あーあ、食糧運び込みで疲れたところに、余計な面倒かけやがって」

春美が、椅子に縛りつけられ、苦痛に呻く男たちを見ながら言った。男たちは眼を見開いた。

「日本人なのか？」

林田が問うた。春美が「ああ、そうだよ」と答えると、林田は春美と静枝を見ながら、「では、どちらかが水野ハナなのか？」

と苦しい息の下から声を絞り出した。

ハナさんは……と答えようとした春美を、ソヒョンが手で制止し、大声で言った。

「その前に、お前ら、何者？」

「自分らは、国のため働いている草莽の志士だ」

太った頬髭の海野が怒鳴った。

「やまとなでしこともあろうものが、国事に奔走する者に、この仕打ちはなんだ！ 恥をしれ、貴様ら！」

「だっちもねえこと！」

静枝が山梨言葉で罵りながら、海野の股間に拳を打ち込んだ。海野は悲鳴をあげ仰け反って号泣し、他の二人は青ざめて顔をそむけた。

「おまんら、ちよびちよびしてると、きんたまぶつ潰すぞ！」

そう凄まれ、林田がわめいた。

「や、やめろ。悪かった。謝る。なんでも言うことを聞く！」  
打って変わって低姿勢となった林田の股間に、ソヒョンは懐からナイフを引き抜き、ぎらつく刃を押し当てた。林田は、喉の奥で「ひい」と悲鳴をあげ、眼から涙をこぼした。  
「正直に話してもらおうよ」

三人はあつさりと言状した。彼らの「計画」は杜撰ずざんきわまりないものだった。彼らは旅行鞆かばんに、宝石や金塊の他、女性用の赤い支那服を持ち歩いていた。劉春燕リウチュンインに接触できれば、その宝石や金塊で買収し、多くのロシア軍人を殺害させ、騒ぎを大きくさせるつもりだった。もし、春燕と連絡できない場合は、細面の山本が紅灯照ホンダアンヂェアオに女装し、ロシア軍人を殺す手筈になっていたのだ。

私に接触した理由も喋った。私が買収に応じるような男だったら、マラトフを殺したの  
は紅灯照ホンダアンヂェアオだと触れ回ってくれと依頼するつもりだったのだ。

「あいつは、馬鹿正直な朴念仁パクニョニムのようだったから、諦めた……」

と呻くように白状する林田に、女たちは苦笑しつつ互いを見やった。

「お願いです。ハナさん」

林田は、涙を流しながら、静枝と春美を見比べながら、懇願した。

「同じ日本人じゃないですか。清国政府を覆滅ふくめつすることは、大日本帝国のためなのです。支那に新たな親日政権を樹立し、ともに手を携えて西洋の脅威に立ち向かうことが、大東亜百年の計なのです。どうか、紅灯照ホンダアンヂェアオの女を、ご紹介ください。お願いです」

「ふーん、そっか」

ソヒョンが、ナイフをきらめかせながら、林田に顔を寄せた。林田は恐怖に顔を歪め、震えるばかりだった。

ソヒョンは言った。

「じゃあ、朝鮮の王妃様、暗殺したのも、大東亜百年の計か？」

五年前の明治二十八年、日本の軍人や壮士が大挙して朝鮮王宮に押し入り、世継ぎの王子セジヤ（世子）の母親である閔妃ミンヒを暗殺した事件は、国際的な批判を呼び、朝鮮各地に抵抗運動を巻き起こした。

「あ、あれは、朝鮮王室が改革を怠り、あまつさえ、あの王妃がロシアと手を結ぼうとしたからであって……」

大日本帝国に代わって言い訳しはじめた林田の頬を、ソヒョンは切り裂いた。血が噴出し、林田は絶叫した。ソヒョンは、激しい憎悪の面差しでさらに責めた。林田の太ももに、ナイフを突き刺し、泣き叫ぶ林田に目もくれず、容赦なく幾度も突き刺した。これほど、冷静さを失ったソヒョンは初めてだった。

彼女は、やはり朝鮮人なのだ。

「待って！」

さらに林田を傷つけようとナイフを振りかざしたソヒョンに、静枝が叫んだ。

「ハナさんに何も言わずに、殺すのはやばいぞ！」

「そうよ、ハナさんが帰ってくるまで、待ちましよう！」

春美も言葉を添え、ソヒョンは、振りかざしたナイフをおろした。もはや呻き声をあげる力もなく痙攣する林田に、眼鏡の山本が激昂して怒鳴った。

「貴様ら、このままですむと思うなよ。俺たちには、政府や軍のお偉方もついているんだからな！」

その言葉に、静枝と春美は不安そうな面持ちになって、互いを見やった。それを見た山本は勝ち誇ったように言った。

「いずれお前たちは一網打尽だ。警察にも裁判所にも、俺たち東興会の息のかかった者がいる。お前ら全員、死刑だ！」

「ど……どうする？」

静枝が怯えた声を出し、ソヒョンに言った。

「ねえ、やっぱりまずいぞ。話は聞き出したんだし、ここは放してあげたら」

「だめ！」

叫んだのは、春美だった。静枝の肩を掴み、山本を凝視しながら言った。

「あたし、この手の男はたくさん知っている。やれ大臣の知り合いだ、やれ大将の知り合いだと自分を偉く見せ、いづれ倍にして返すからとさんざん金をちよろまかしておいて、ごろんを決め込む奴さ。そんな奴、信じちゃだめ！」

「だまれ！」

山本は怒鳴った。

「東興会を馬鹿にするな。お前らみたいな醜業婦くずれなんぞ、屁でもねえ。いいから、さっさと縄を解け！」

「なんだって……」

春美は、青ざめた面持ちで、唇を振るわせながら、山本に気づいた。豪語していた山本の顔が恐怖に歪んだ。

「……女をばかにするのも、たいがいしなよ」

言うなり春美は、山本の股間をぎゅっと握りしめた。山本は絶叫した。

「や、やめろ……」

「うるさい、男だからって威張るな！ 男でなくしてやる！」

「や、やめて……」

山本は、首を激しく振り、のけぞって痙攣しながら、懇願した。

「そ、それだけは……殺されてもいいから……それだけは……」

「やだ！」

次の瞬間、肉塊が弾ける音が響き、山本は一瞬海老ぞりになり、ぐったりと動かなくなった。

春美は、山本の睾丸を二つとも、握り潰したのだ。

「オ、オニ、チャレツツ、チャレツツ（春美さん、やったね）！」

ソヒョンが、昂奮を抑えきれず肩で息をする春美を抱きしめた。

「春美さん、えらいずら！」

静枝も抱き着いてきて、春美は笑みをこぼした。

「ひ……ひいい！」

まだ無疵むきずだった、頬髭の太った海野が悲鳴をあげた。

「た、助けてくれ……悪かった……もうしませんから……お願いします」

海野は、恐怖で失禁しっこんしていた。

「わ、私は、眠れる獅子と言われた大清帝国を打ち破ったわが大日本帝国、帝国を統すべる偉大なる天皇の臣民として、西欧列強に負けぬ、栄はえある大東亜の紐帯ちゆうたいを作りあげようと粉骨碎身ふんこつさいしんしてきた。だから、だから……」

女たちが見つめるなか、海野は号泣した。

「たすけてえ！ 死にたくない！ いじめないでくれえ！」

「うるさい！」

静枝が、拳を握りしめ、海野の股間に打ち込んだ。海野は絶叫し、意識を失って静かになった。

その間、私は厨房から物音を立てずに覗のぞいている他なかった。

なぜだろう……。

不思議な気分だった。

ハナが、井口虎吉の陰囊えんぶを抉り、睾丸を摘出して握り潰すのを目の当たりにした時、私は恐怖で意識を失った。

だが今、三人の女たちが、次々と男たちに残酷な拷問を行い、白状した後もやめず、一人は去勢された。その風景を見ているにもかかわらず、恐怖も、男たちへの憐憫れんぴんの情も湧かなかつたのだ。

ハナが、部下の宋ソウ紀キとともに帰ってきたのは、その二日後だった。その間、林田ら三人は、食事も与えられず、庭の隅の小さな物置小屋に放り込まれていた。

小屋を開け、縛られたまま血と糞尿にまみれて、瀕死の状態の三人を一瞥いちべつしたハナは、宋紀に冷たく命じた。

「干ガン掉テイ（始末して）」

「あの女、やはりブラゴベシチェンスクにいたのね」

ソヒョン、静枝、春美が、三人を痛めつけた経緯を語り、さらに私が東興会の正体——日本の政府や軍高官の息がかかった謀略組織——を説明した。聞き終わったハナは、憂鬱そうに言った。

ここ数日、彼女は近隣を駆けめぐり、主立った馬賊の首領たちを訪ねた。高老爺カオラオヤに協力を断られた劉春燕が、他の馬賊と交渉したのではないかと探し回ったのだが、いずれの

馬賊も、彼女と接触した気配はなかった。

「馬賊を仲間に入れるのは諦めて、暴動をけしかけるつもりなのね、彼女は」

そう呟いて、ハナは押し黙った。女たちは顔を見合わせ、うつむいた。

「どうする？」

私は問うた。

「ロシア軍と清国軍の衝突を企んでいるのは、春燕だけじゃない。東興会の三人のような輩が他にいないとも限らない」

私は続けた。

今、この地で起こりつつある事態は、義和団や、その後ろ盾となっている清国政府の筋書きだけではない。清国の衰退につけこんで、大陸に進出しようと蠢くロシアや日本などの近隣諸国や、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなどの欧米列強の手先も関わっているのだ、と。

そうハナに告げると、

「そんなの、前からそうさ」

と、怒りのこもった眼を私に向けた。

「あたしだって、親から売られたとき、女衞に言われたよ。これはお国のためなんだ、しつかり稼いで送金しろって。女たちが売られた先には、必ず日本の軍人や商人がやってくる。お国のためと言いながら、いやらしい目つきで女に抱きつく。そして必ず、ほかの国の奴らがやってきて、互いに戦うんだ」

瞬きもせず見詰めるハナの視線に耐えられず、私はうつむいた。台湾で、私たち日本軍が踏み荒らした地で、私に向けられた女たちの憎悪の眼差しが、脳裏に蘇った。

ハナの言葉が続いた。

「ここでも、同じことが必ず起こる。止めようたって、しょせん馬賊の手に負えるものじゃない。ここをいざという時のための避難所にしたし、馬賊たちに近くに待機してもらい、ロシア軍が押し寄せたら、なるべく避難民を保護するよう頼んだ。あたしができるだけの事はやった」

虚空を凝視してハナは言った。

「あたしは、劉春燕を疑いもせず、高老爺に紹介してしまった。知らなかったとはいえ、こうなってしまった以上、放っておけないんだ」

そう言って俯き、しばらく唇を噛みしめていたハナは、やがて顔を上げ、私に眼差しを向けた。

「お前に頼みたいことがある」

静かな声音で、ハナは言った。

「静枝と春美を連れて、韓国に渡ってほしいんだ」

「え……！」

「なんですって！」

叫んで詰め寄ったのは静枝と春美だった。ハナは、二人を手で制して言った。

「あんたたちとソヒョンは、私が留守の間に東興会の連中を捕まえ、すべて白状させた。完璧だったよ。あんたたち二人は、菊池さんと一緒に平助を見つけ出して欲しい。それから、ソヒョン」

ハナは、啞然とするソヒョンに顔を向けた。

「お前も一緒に韓国に行つて。通訳が必要だから」

「で、でも……」

ソヒョンはおろおろした。

「ここ、どうする？ 太太ひとり、大丈夫？」

ハナは優しく微笑み、ソヒョンの髪を撫でながら言った。

「あたしは、何とでもなるさ。これからは、宋紀たちも手伝ってくれる。むしろ、静枝や春美を巻き込みたくない。いや二人には、ユキの仇を討ってほしいんだ。お願いだから、言うことをきいて」

ハナは言葉に力をこめた。

「ロシア軍相手に、あたしがどれだけできるかわからない。もし、みんなを巻き込んでしまったら、せつかく行方を突き止めた橋口平助に復讐することもできなくなっちゃう。だから……」

涙で潤んだ眼を、ハナは私に向けた。

「菊池さん、お願いだから、ソヒョンと一緒に、二人を韓国に連れて行ってあげて」

その十日後、私はウラジオストックに向かい、日本総領事館の駐在武官室に伊東大尉を訪ねた。

私は正直に、環璣にロシア軍が攻め込んでくる危険が増していること、ハナから、聚英棧で働く二人の日本女性と朝鮮人少女をしばらく釜山に滞在させたい、と頼まれたことを話し、旅券と切符の手配を頼んだ。

「君は、環璣には残らないのか？」

伊東大尉は不審そうに言った。

「できれば、君には情勢報告を頼みたいのだが……」

私は、無事三人を韓国に送り届けたら、なるべく早く戻ると告げ、さらに言った。

「うまくいけば、ハナはこちらに協力してくれそうなんだ。頼む」

伊東大尉は、わかった、と頷き、釜山の総領事館に、便宜を計ってもらうよう打電しておく、と請け負ってくれた。

翌日、私は伊東大尉から旅券などの必要書類を受け取り、三人の女たちとともに船に乗った。

ウラジオストックから大陸沿いに航行し、やがて朝鮮半島の山河が見えてきた。甲板に出てみると、舷のロープにもたれて、ソヒョンが海の向こうの緑の山々を見つめていた。

「お前の母さんの生まれ故郷だね」

そう声をかけると、ソヒョンは微笑んただけで無言だった。

「ようこそ」

釜山港で船を下りると、市場だった。地面に敷いたゴザに、太刀魚やタコ、イカなどの魚介類が山盛りに並べられて売られていた。

生臭い匂いがたちこめる市場まで出迎えに現れたのは、幣原という名の、眉が太く、眼が大きく、声も大きな総領事だった。まだ二十八歳だが、東京帝国大学を卒業し、ヨーロッパに勤務した経験もある優秀な若手外交官だと、伊東大尉から聞いていた。

人力車に分乗して総領事館へ向かった。港からほど近い松林の茂る小高い丘にかけて、日本風の家屋や商店がびっしりと軒をつらねている。

「なんだか、日本にいるみたいすら、」

静枝がぼかんと口を開け、きよるきよる見廻しながら言っているのが聞こえてきた。行き交う人も、洋服か和服で、朝鮮服を着ている者は僅かだった。今乗っている人力車を引いているのも、日本人である。

「もともと、この釜山には江戸時代から倭館が置かれ、日本人の居留地だったのです」私と並んで車を引かせていた幣原総領事が言った。

「昨年、京釜鉄道の敷設が決まってから、日本から移住する者が急激に増えました。いまは日本人居留民が五千人もいる。ますます増える一方です。利に敏い商人から、食い詰めて一攫千金を夢見る者まで、さまざまですよ」

東京で失敗したらしい橋口平助も、そのような夢を見て、この地に渡ったのだろうか。そう思った私の眼に、黒い帽子に白いゆったりとした朝鮮服を着た白髭の老人が映った。

老人は、明らかに憎悪の眼差しを、私に向けていた。

「五年前の一件で、朝鮮人の日本人に対する反感は、なかなか消えませんが」

老人の眼差しに気づいたらしい幣原総領事は言った。五年前の一件とは、明治二十八年に、日本の軍人や壮士が朝鮮王宮に大挙押し入り、閔妃を暗殺した事件を指しているのは明らかだった。幣原総領事は渋い顔つきで続けた。

「くれぐれも朝鮮人を愚弄したりする真似は避けてください。清国に勝って以来、日本人の横暴さは眼に余る。今はよくても、いずれしつぺ返しが来ます」

豪放そうな顔つきだが、思慮深さも持ち合わせた外交官のようだった。

総領事館に着くと、幣原総領事は大理石の床に白檀のテーブルを置いた応接間に私たちを請じ入れ、

「やりませんか」

と、戸棚を開けて赤い葡萄酒入りのガラス瓶と、ガラスのコップを取り出して、テーブルに並べた。十二歳のソヒョンの前に置かれたコップにもワインが注がれた。当惑するソヒョンに、幣原総領事は、

「フランスでは、あなたくらいの年ならば、呑んでもよいのですよ」

と言ったが、ソヒョンは澄まして答えた。

「わたし、フランス人じゃない。お酒、呑まない」

「これは一本取られましたね」

幣原は美少女に向かい、フランス人のように紳士的に一礼し、

「では、こちらを」

と、彫刻を施した木箱の蓋を開けた。なかには、紙に包まれたチョコレートが詰まっていた。一口つまんで、

「อร่อย (おいしい)！」

と喜ぶソヒョンを、幣原は眼を細めて見つめ、静枝や春美にも勧めた。やがて、幣原夫人が現れ、女たちを庭に誘った。応接室には、幣原と私、男二人だけとなった。

「ねえ、菊池さん」

幣原総領事は、洗練された外交官の面差しを崩さずに問うた。

「ロシアは、やはり満州に出てきますか？」

「どうでしょうね……」

私は言葉を濁した。

「清国政府が噂どおり、義和団をあやつって欧米列強を排除しようとするならば、アムール川を越えてロシア軍が攻め込んでくる可能性は高いでしょう」

「そんな兆しがありますか？」

私は無言で頷いた。幣原総領事は腕組みして考え込んでいたが、やがて口を開いた。

「私が恐れているのは、義兵が、清国やロシアと手を結ぶことです」

「ウイビョン？」

「日本語でいえば義兵ですな。逃亡した軍人や農民が武装して、日本軍の駐屯地や、日本と親しい朝鮮人を襲うのです。最近は少なくなってきましたが、今でも残党が各地に潜んでいて、何かあれば、また猖獗しかねない。そもそも、義兵とは、戦国の世に豊臣秀吉がこの地に出兵し、朝鮮王や官軍が逃亡したかわりに抵抗した民の事。つまり朝鮮人にとって、日本の進出は、豊臣秀吉の出兵を思い起こさせる事なのです」

「そうなのか……」

加藤清正の虎狩りなど、秀吉の朝鮮出兵時の武勇談ばかり聞かされてきた私は、そこまですで日本人が憎まれている事を知って、胸が塞がれる思いだった。

台湾と同じだ。

土足で他国に踏み込む事は、思わぬ恨みを残す……。

「あなた……」

庭から、幣原総領事の夫人が入ってきた。

「なんだね」

まだうら若い夫人は言った。

「お客様がお連れの方が、あるお方をお捜しなんだそうです。お力添えしてくださいな」



「ほう、そうかい。どなたですか？」

夫人の背後で恐縮している静枝と春美に眼をやった幣原総領事に、夫人は春美の腕を取って微笑んだ。

「さ、遠慮なく申し上げて」

春美はもじもじしながら言った。

「私の知り合いで、林はやしという人がいます。いま、行方不明になっていて、ここに渡って働いているという噂があるのです」

それは、釜山に着く前の船の中で、打ち合わせていた台詞だった。

「その人のこと、こちらで分かりませんかでしょうか」

背をかがめるようにして聞くと、幣原総領事は何の疑念も面差しに浮かべず、

「ああ、居留民の名簿がありますので、持ってこさせましょう」

と書記官に命じて、紙の綴りつづりを持って来させた。静枝は、

「私は字が読めませんので」

と私に綴りを渡した。「ハ行」の綴りをめくると、果たしてその名があった。

橋口平助 商業

妻 秀子

釜山港弁天町二丁目……

私は素早く、その地名を口の中で呟つぶやいて暗記した後、

「林喜兵衛という名があるが、これかね？」

と春美に問うた。春美は首を横に振った。

「どうやら、いないようです」

と私は幣原総領事に綴りを返した。幣原総領事は笑って言った。

「正直、日本人の出入りが激しく、うまい話を聞きつけて届け出もせず引越したり、事業に失敗して夜逃げする者も多いのです。総領事館としても把握しきれません」

その夜、総領事館で宴会が開かれた。宴が終わった後、私たちは総領事館近くの日本式旅館に泊まった。

「明日は……」

私は、記憶していた所番地を紙に書きつけ、ソヒョンに渡した。

「ここを探ってくれ」

心得顔で頷くソヒョンに、私はさらに言い添えた。

「一人きりにさせて悪いが、くれぐれも気をつけてな」

ソヒョンは相好そこうを崩した。

「菊池さん、忘れたか？」

「何を？」

「わたしにきんたま蹴られたこと」

くすくす笑って、ソヒョンは言った。

「心配、いらぬ。私、大丈夫」

翌朝、ソヒョンは市場で仕入れた黒いチマ（スカート）に白いチヨゴリ（上衣）、髪を後ろに束ねて三つ編みにし、典型的な嫁入り前の朝鮮人少女の恰好をして、弁天町へと向かった。

その間、私と静枝と春美は、幣原総領事がつけてくれた書記官の案内で、釜山の名所を見物し、旅館に戻ると、ちょうどソヒョンが戻っていた。

「いなかった」

ソヒョンは短く報告した。

「留守だったのか？」

そう問い返すと、ソヒョンは説明した。

総領事館にあった在留邦人名簿に書かれていた番地に行くと、そこは食い詰めて流れてきた日本人が寝起きしている木賃宿だった。

「そういや、清国との戦いで金鵝勲章もらったと威張っていた奴がいたな」

一人、橋口平助のことを覚えていた男が言った。

「とつくにいねえよ。たしか、みりやんとかいう地に行くって言ってたぞ」

ミリヤンとは、漢字で密陽と表記される、釜山から約四〇キロ北西の都市らしい。京釜鉄道の駅が置かれる予定になっていた。

「秀子っていう女も一緒に、そのみりやんとやらに行ったの？」

静枝が訊ねると、ソヒョンは首を振った。

「平助、その女のひと捨てて一人で密陽に行った。秀子さん、どこにいるか分からない」

「またなの……」

静枝が呆れ顔で肩をすくめ、溜息をつくとき、

「あいつは、そんな奴さ」

春美が唇を噛んだ。

「絶対に見つけ出して、きんたま潰してやる……」

夕食前、私は案内人をつけてくれたお礼かたがた総領事館に出向き、密陽を訪ねたいと申し出た。幣原総領事は、

「では、船を用意させましょう。川を遡れば、一日あれば着きますよ」

と言ってくれた。翌日の昼前、指定された洛東江の畔の船着き場に行くと、五人乗りの屋根のついた船に、朝鮮人の漕ぎ手が一人待っていた。緑の山々を引き裂くように流れる大河を北へ遡り、まだ日暮れ前ではあったが梁山という町で一旦船を下りた。今夜はここで一泊し、明朝出発、昼前に密陽に着くという。

「宿はあるのか？」

漕ぎ手に問うと、ソヒョンの通訳を挟んで答えた。

「今から探す」

その答えに、静枝と春美が不安そうに顔を見合わせたが、じきに宿は見つかった。子供のいない中年夫婦が二人きりで住んでいる家で、朝鮮式に、井戸のある中庭を挟んでL字型に三畳ほどの部屋が四つ並んでいた。そのうち二つが外から来た旅人に提供している部屋だった。漕ぎ手は、その家に泊まるつもりはないらしく、「明日、迎えに来る」と言い残して去っていった。顔見知りのいるところで一杯やるつもりなのだろう。

部屋の一つに女たちが休むことになり、私は一人で一部屋を占領した。荷物を置いて一息入ってから、ソヒョンを呼び、家の主あるじに問うた。

「このあたりに、日本から来た連中が集っている店はあるか？」

一軒あるとの答えだった。私は、静枝と春美を家に残し、ソヒョンだけを連れて、主に教わった川沿いの居酒屋に向かった。

橋口平助は、密陽に行く途中、この町に立ち寄ったはずだ。少しでも、彼に関する情報を仕入れたかった。

「うるせー、ばか！」

にほんのみせ、と拙つたない文字で墨書された旗を掲げているその店に入るなり、いきなり、瓢箪を二つに割った容器が私の胸にぶつかった。中に入っていたどぶろくのように白濁している酒が顔にかかった。

飛んできたほうを見れば、庭に四つ並べられたうち、隅っこに置かれた四角い食卓のあたりに、和服をだらしなく着た若い娘が一人、真っ赤な顔で仁王立ちになり、印しるし絆ばんでん纏を着た人夫にんぶふうの男を怒鳴りつけていた。

「どれだけ吞もうが、あたしの勝手ずら！ ほっとけ！」

静枝と同じ山梨の訛なまりだ……、と思っている、

「まあまあ、秀子ひでこさん」

この店の女将おかみさんらしい四十がらみの女が割って入り、いきりたつ娘の肩を押さえた。

秀子……！

私は思わず、ソヒョンと顔を見合わせた。

「あんた、また騒さわぎを起おこす気かい？ 可哀想だと思って、つけで酒吞ましてやったけど、そんなに暴れるなら、もう出入り差し止めだよ！」

「てやんでえ！」

怪しげな江戸言葉でくだをまきつつ、娘は、女将を振り払った。

「姐ねえさん、やめなよ」

「いいから、こっちに来な、一緒にばーつとやろうぜ」

印絆纏の男二人が娘に近づき、左右から挟むようにして、彼女の両腕を取った。

「触るな！」

娘は、印絆纏の男に平手打ちを食わせた。男は棒立ちになった。その男の股間を娘はいきなり蹴り上げた。

「ぎゃっ！」

悲鳴をあげて両手で股間を抑え、びよんびよん跳ね回った。

「あ、こいつ何をするか！」

男の仲間が娘に掴みかかり、またも鞆丸を蹴り上げられ、地面をのたうち回った。

「さあ、次きんたま潰されたいのは、どいつずら！ かかつてきやがれ！」

娘は店じゅうを見回して一喝した。

「かかつて来ないなら、こつちから……」

娘がよろよると、他の客に掴みかかろうとした時、

「ハシマハシマ（やめなさい）！」

ソヒョンが、暴れる娘の背後にすつと駆け寄り、右腕をねじあげた。

「いててて、何するずら！」

悲鳴をあげた娘の身体が空中で一回転し、どすんと尻餅しりもちついた彼女は、茫然として周囲を見回した。

店の客たちも感嘆の声を漏らした。朝鮮服をきた十二歳の小柄な美少女が、酔っぱらっているとはいえ、大人の女を鮮やかに投げ飛ばしたのだから。

「お、おめえか！」

娘は、澄まし顔で立つソヒョンを指さし、立ち上がって叫んだ。

「朝鮮人の小娘が、よくも……！」

と罵ののしろうとして、喉を詰まらせた。

ソヒョンの右足が跳ね上げられ、爪先が娘の割れた裾から股間を突き上げていた。

娘は、両手で股間を抑えて、再びうずくまった。

「股、蹴る。女のひとも、痛い」

ソヒョンがそう言い、客たちはどつと笑った。女は顔を真っ赤にして、よろよると立ち上がり、店から出ようとする。

「ちよつと待ってくれ」

私はそう言って、娘の前に立ちふさがった。このまま行かせるわけにはいかない。

「君はひよつとして橋口平助と一緒に駆け落ちした、秀子さんじゃないか？」

そう問うと、娘の眼が見開かれた。わなわなと唇が震え、

「うるさーい！」

いきなり、その膝小僧が私の股間を突き上げた。眼の前がまっくらになった。

「どいつもこいつも、あたしを馬鹿にしやがって……こら、酒もってくるずら！ 持つてこねえと、店に火いつけたるぞ！」

座り込んで泣きわめく娘の側で、私は悶絶するしかなかった。

「ほんと、申し訳ないこつてごいす」

秀子は、おずおずと私の部屋に入ってきて、正座して額を床にこすりつけた。その後

にソヒョンをはじめ、静枝や春美たちも立っている。

「もう、大丈夫なの？」

春美が心配げに訊ねた。私は「ああ、だいぶいい」と答えた。

昨夜、私の股間を蹴り上げた秀子は、そのまま酔っぱらって眠り込んでしまった。ソヒョンが店の男たちに頼み、酔い潰れた秀子と、急所を蹴られて動かなくなった私とを、宿まで運んでくれ、そして夜が明けたのだ。

酔いが覚めた秀子は、別人のように恐縮していた。村長の娘で東京の女学校に進んだという背景や、女学校の担任の話から、高慢そうな女を想像していたが、本人は小柄で、地味な顔だちの、おとなしそうな少女だった。年は十八歳だという。

「いったい、何があったんすら？」

同じ山梨生まれの静枝が問うた。春美も訊ねた。

「あんた、橋口平助と一緒にやなかったの？」

秀子はしばらく眼をしばたかかせていたが、やがてわっと泣き出した。涙を拭きふき語るには、最初、釜山に渡ってきた頃の平助は、真面目に仕事を探していたが、生来、地道に働くことのできぬ男で、やがてぶらぶら遊び回るばかりとなり、秀子が小料理屋で仲居をしながら生活を支えるありさまとなった。

そして一週間前、平助は秀子の衣服や身の回りの品まで売り払い、夜逃げした。秀子は後を追ったが、この梁山で手持ちのお金が尽き、腹を空かして転がり込んだ昨夜の店を手伝いながら、なんとかお金を貯めて平助を探すつもりでいた。しかし、三日前に客から酒を勧められたのが運の尽き、酔っぱらうとがらりと人が変わって暴れ出す秀子に、店の女将も手を焼き、追い出されそうな気配なのだという。

「そんなこんなで自棄になっちゃまって、軍人さんの大事なところを蹴るなんて、うら、ほんとし訳ないでごいす」

「いや、それはいいんだ」

と私が言うと、ソヒョンがくすくす笑いながら、

「菊池さん、慣れてるからね」

と言いつつ、秀子だけでなく、静枝も春美も「え！」と叫んで一斉に私を見た。部屋にいる四人の女たちの好奇心に満ちた眼差しが、私の股間と顔の両方に交互に注がれた。

「そんな事より……」

私は、彼女等の眼差しから顔をそむけつつ、言った。

「私たちは橋口平助を捜している。一緒に密陽まで行かないか？」

「うーん……」

秀子は俯いて、しばらく無言だったが、やがて顔を上げ、静枝や春美の顔を見、面差しを歪めて口を開いた。

「あたしみたいに、あの男に騙されたひとが、こんなにいるって知って、なんだか、自分が情けなくなってきた……」

死んじまいたい……。そう呟いて秀子は、両膝を立てて、その間に顔を埋めた。

「[to]」アイゴー モンテロシニコ 死田田田田 (うざい、勝手に死ねよ)！」

ソヒョンが、あきれ顔で言った。

「え？」

顔をあげた秀子に、ソヒョンは笑みをつくって言った。

「死ぬより、あいつのきんたま潰す、そっちよくない？」

「……潰す？」

驚愕する秀子に、静枝が言った。

「そ、うらと春美さん、一人一個ずつ潰してやるんずら」

春美も言った。

「二つとも潰して、これ以上、悪さできないよにしてやるの」

最後にソヒョンが、懐に忍ばせたナイフを取り出して、続けた。

「私は、これで、あれ、切る」

「あんたら……」

秀子は、眼を見張って、女たちの顔を見比べた。

「最初から、そのつもりでここに？」

女たちは一斉に頷いた。

その日の朝早くに、私たちは船で密陽に向かった。

洛東江を溯るうちに、やがて密陽の街が見えてきた。川沿いの丘の上に、門柱を朱く

塗った郡役所の建物が臺を連ね、背後の山の上に、緑に埋もれた寺院の屋根も覗かせている。人口約一万。

私たちは、郡役所の対岸に船をとめた。そこから数百メートル先で、駅舎の建設工事が行われている。鉄道工事は日本人が指導しているはずだから、そこで情報を仕入れるつもりだった。

まず、工事現場の近くで宿を探し、荷物をほどいた。それから、私はソヒョンと二人、女たちを宿に残して工事現場に向かった。

日本人と朝鮮人が入り交じって働いているなかで、大声で仕切っている現場監督は日本人だった。

「ああ、あの金鶏勲章野郎か」

橋口平助の事を訊ねると、現場監督はしかめ面で即答した。ここでも、清との戦争で賜った勲章を自慢していたらしい。

「ろくに働けねえくせに、何かというと喧嘩騒ぎを起こしやがって、挙げ句の果てに、地元朝鮮女に手を出して、袋叩きにされやがった。ほうほうの態で逃げ出して、どこに行ったかなんて、知らねえよ」

それが、つい二日前の事だという。

「どこ行たのかな？」

と首を傾げるソヒョンに、監督は言った。

「そもそも朝鮮女に手を出したのは、素寒貧すかんびんになっちまったので、金目当てだったって話だぜ。そんな遠くまで行けるはずはねえ。まだ、そこらでうろついてるんじゃないか」

「なんだか……」

工事現場を離れ、宿へと戻りながら、ソヒョンが言った。

「どこに行っても、おなじことする人だな」

「ああ……」

私は頷いた。行く先々でトラブルを起こし、女の肌にすがり、逃げる。

ひよっとして……私は思った。

私は、台湾で少女を誤って射殺した悪夢に悩まされ、その罪悪感からか、妻子といい関係を築けず、逃げるように大陸にやってきた。

橋口平助も、同じような悪夢に、今でも悩まされているのではないだろうか。

旅順で、井口虎吉らと、ハナの友だちだった三原ユキという少女を犯した罪悪感に。

宿に戻って、静枝や春美、秀子に現場監督から聞いた話を伝えると、三人三様に溜息をつき、

「どこに行っても、おんなじことをする男だねえ」

と、ソヒョンと同じ台詞せりふを呟いた。

「なんだか口惜くやくしいすら。こうなったら、何がなんでも、とっつかまえて、きんたま潰してやるすら！」

静枝はそう叫んで立ち上がり、ソヒョンに向かって言った。

「まずは腹はらごしらえ。なんか、おいしい朝鮮のお昼を食いたいすら」

朝鮮の食事は唐辛子がきつく、馴れぬ日本人には辛いと聞いていたので、釜山に来て以来、和食で通していた。

ソヒョンは微笑んで答えた。

「じゃあ、日本人でも食べられる料理、紹介する」

宿の主に教わり、近くの山の麓ふもとにある店に入った。新しく小綺麗な構えで、「参鶏湯サムゲタン」と墨書した看板を掲げている。

食卓について待っていると、ぐらぐら煮立つ鉄鍋が運ばれてきた。鍋の中には、きれいに羽をむしって煮込んだ雛鳥ひなどりが一羽入っている。店の主人が包丁で雛鳥を切り分けると、腹にはうるち米や朝鮮人参、栗などが詰められていた。

「わあ、鶏粥とりがゆだ。おいしそう」

女たちは甲高い声ではしゃぎ、参鶏湯に舌鼓を打った。あっさりした風味で、日本人の舌にもあう。

「ねえ、ソヒョン」

静枝が、無言で木匙きじを使い米を口に運ぶソヒョンに訊ねた。

「懐かしいかい？」

ソヒョンは首を振って答えた。

「食べるの、はじめて」

ほころんでいた静枝の顔が強張こわばった。

「そっか、ソヒョンも、朝鮮は初めてだったずらな」

と頭をさげる静枝に、ソヒョンは眼を丸くし、

「ケンチャナー 大丈夫だよ！」

と笑みをつくり、すまなさそうな静枝の肩を叩いた。

「ソヒョンは、強い子ずら」

静枝はしみじみと言った。

「うらたちみたいに、変な男にだまされるような女おなごになっちゃ、いかんずらよ」

「あんたと、一緒にしないでしょ！」

春美が叫び、秀子は、

「一緒ずら」

と自嘲気味に、鍋から柄杓ひしやくで粥をすくい、椀わんについてすすった。

その時……。

店の外でどやどやと足音が響いた。見ると、西洋式の軍服を身につけ、サーベルを佩はいた役人が数名、朝鮮服の村人十数名を率いて走ってくる。

「ムスンソリヒヨ 何なんの騒さわぎ？」

ソヒョンが問うと、村人たちが叫び返した。

「サリンダ 何なんだ（殺人だ）！」

「ロシヤガソヒョクダ 女おんなが殺された！」

ソヒョンはさらに叫んだ。

「ヌガ 誰たれ？」

複数の声で答えが返ってきた。

「イルホニン 何なんだ（日本人）！」

（くくく）